

研究ノート

原理主義についての原理的・批判的考察

山田 秀

目次

前書き

I 根本主義誕生と原理主義について

II 米国の原理主義

III ローター・ローズの独自の分類と考察

後書き

前書き

一 本稿を目にされる読者は「原理主義」という語句によって何を連想されるであろうか。九・一一事件を想われるかも知れない。イスラム原理主義を想われるかも知れない。アメリカの原理主義を想われるかも知れない。それ以外のことを連想されるかも知れない。私以上にこの問題に関連して詳しい人も多数おられるに違いない。私が本稿において論じようと考えているのは、そうした事情ともちろん無関係ではないが、私の関心の本体はそこに置かれてはいない。政治的問題、宗教的問題、文化的問題について、或る具体的見解を叙べようとするものでもない。政治的論評を企てるものでもない。寧ろ私は、原理主義が語られる幾つかの事実や問題を手掛かりにして、そこに潜んでおり、常に作用している（と私に思われる）構造的な特質を、それも人間本性との連関の下に、描き出してみたいと考えている。

二 おおまかに述べるならば、人間の本性的な要求から、我々は原理的なるものへの遡源的探究を志向するよう予め構造化されており、その限りについて「原理主義的なるもの」との連関へと組み込まれている。しかし、そうした「原理主義的なるもの」への本性的傾動が見られるというこの事態からこれを絶対化していくという誤りを犯す段階で「原理主義」が登場するのではないか。これが私の大雑把な診立てである。後半では、カトリック社会学論家の最近の業績の紹介も交えて、一般に予想されるものとは若干異なる視点からの考察も手掛けてみたい。

以下の叙述はこのことの詳論を目指すのではあるが、成功するか否かについては固より保証の限りではない。た

だ少なくとも原理主義の孕む問題は我々一人一人に無縁ではないのではないかと察知してもらえらるならば、拙稿の目的の大半は達成されたと考えて差し支えあるまい。

I 根本主義誕生と原理主義について

三 先ず原理主義の語源に関連するところから説き始めることにしよう。原理主義という語句は、勿論 fundamentalism の翻訳語である。この原語は、最初は「根本主義」と翻訳されていたようである。一八九五年にナイアガラフォールズで根本主義の闘争綱領が採択された（九参照）。

四 以下では、基本的には小川忠『原理主義とは何か』に依拠して、原理主義一般と特にアメリカの原理主義について概括を試みる。

原理主義という語で連想されるであろうイスラーム原理主義は、一般には、急進的で暴力的なイスラーム保守思想、社会・政治運動をさす言葉と看做されるようである。しかし、一九七〇年代以降に着目すると、「イスラーム復興」という社会現象が見られる。それは、現代社会をイスラームが理想とする世界に反する墮落した状態と考え、イスラームの理想に近づく実践が必要と考える。その組織化された政治・社会運動を「イスラーム主義」と呼ぶ。その運動には、社会公益を担う運動と、政治権力獲得を目指す運動との二つの類型がある。政治的な「イスラーム主義者」の中には、暴力への訴えをも辞さない急進的過激集団も存在する。勢いメディアはこれを報道することになる。

イスラーム世界の動きの全体像に照らしてみると、従って、イスラーム過激派は、社会政治運動としての「イス

ラーム主義」、その社会的背景としての「イスラーム復興」の一部、それも極端な形での一部にすぎない。

先ず、これが注意されるべき第一点である。

五 原理主義の考察を行うに当たって、シカゴ大学「原理主義」研究プロジェクトが参考になる。その研究成果のうち、第一巻『原理主義の観察』、第五巻『原理主義の把握』、特に第五巻が参照される。これによって原理主義の特質を見ると「言うまでもなく、小川氏の著作に依拠してであるが（二二―二三頁）」、

① 原理主義の特質は、・・・新旧の要素が交じった混成的形態である。
② 原理主義者は、宗教的伝統を守ると主張しつつも、それを新しい思想とイデオロギーに拠って達成しようとする。

③ 原理主義者によって理想とされる過去とは、汚れの無い「想像上の過去」である。「過去」の名の下に、現在まで続いてきた秩序を破壊する新しい原理を設定することも可能となる。

④ 十九世紀から二十世紀にかけて「近代に対する反発」という形で原理主義運動は誕生した。次に原理主義のイデオロギー的特徴を見ると（二四頁）、

① 近代化による宗教危機に対する反応、「世俗ナシヨナリズムは宗教を存亡の危機に追いやり、伝統的なコミュニケーションを解体するとして、これに反対反発する。」

② 選択的な教義の構築、「米国キリスト教原理主義は終末論に着目、中絶に強く固執して反発何故であったのか。

——キリスト教倫理からみてシロクロがはつきりしている問題の代表格は、中絶問題である。（河野『アメリカの原理主義』、九〇頁）／イランのホメイニーは危機においてイスラーム法学者が政治的決断を担うという教義を強調」

- ③ 善悪二元論的な世界観、「善と悪、ウチとソト」という分かり易い構図が描かれ、「他者」「外部者」「異人」イコール「邪悪なる者」と位置づける。」
 - ④ 聖典の無謬性の主張、「聖典の無謬性を主張し、解釈を拒否する。↓解釈の余地があつた聖典を文字通り読め、という一つの聖典解釈。」
 - ⑤ 終末観の世界認識と救世思想、「終末論とユートピア思想がセットとなつた世界観」の諸点が確認される。
- 更に、原理主義には以下に列挙される如き組織的特徴が見られる（三一―三二頁）。
- ① 選民思想、「原理主義組織とそれ以外との峻別＋幹部集団と一般構成員との峻別」
 - ② 組織のウチとソトとの明確な区別、「原理主義組織とそれ以外＝罪深き者共との峻別」
 - ③ カリスマ的な指導者の存在、「指導者の支持は組織内で絶対視」
 - ④ 厳格な規律、行動規範「集団行動を重んじ、厳格な行動規範が実施」
 - ⑤ アブラハム系原理主義と原理主義的運動に関しては、前者は、宗教がその直面する問題解決のために政治に関与する。後者は、国民国家のアイデンティティー強化のために、宗教が動員される。「敵」として意識されるのは、他民族、異教徒。北アイルランドのアルスター・プロテスタント。インド・ヒンドゥー教による民族義勇団」
 - ⑥ ユルゲンスマイヤー教授によると（三四―三六頁）、宗教ナショナリズムとは、アブラハム系原理主義と原理主義的運動を包括的に呼ぶ名称であつて、ここにおいて政治性と宗教性は纏れ合っている。
- その宗教ナショナリズムの特徴を列挙すると、
- ・世俗ナショナリズムを拒否し、

- ・ 世俗ナショナリズムを西洋的かつ新植民地主義的とみなす。
 - ・ 拒否は根本的なものであり、敵意があり、かつ暴力的である。
 - ・ その闘争を宗教的なレトリック、イデオロギー、リーダーシップで遂行する。
 - ・ 世俗的国民国家に代わる宗教的な選択肢を提示する。
- などの諸点が確認される。

小川忠氏の評価によると、ユルゲンスマイヤー教授の議論の特徴は、世俗ナショナリズムと宗教の関係を、秩序をめぐる競争相手と捉えることである。しかし、それには難点がある。西洋Ⅱ世俗ナショナリズム、非西洋Ⅱ宗教ナショナリズムと捉え、よって、両者の対立を「西洋」と「非西洋」の対立に転化してしまっているからである（三六頁）。

愛郷主義としての原理主義（松本健一『原理主義 ファンダメンタリズム』）
 愛郷主義の「郷」（郷土）とは、共同の郷土を指し、共同の郷土の文化とか宗教に誇りを持つという自然な感情、共同の生活によって培われる思想、感情、あるいは文化や宗教を一つの原理に仕上げたものが「パトリオティズム」愛郷主義。ポスト冷戦時代のナショナリズムの復権とは、この愛郷主義であるとされる。

以上の検討を経て小川氏の解する原理主義とは、「近代化を推進する世俗政治権力に対して宗教の側から反抗を試みる思想、運動」と総括される（四〇頁）。それと類似するが、政治目的と宗教目的が合体して国民国家の統合を強化しようという思想、運動を「宗教ナショナリズム」と呼ぶ。

II 米国の原理主義

七 原理主義は何故アメリカで生れたのか？——米国という国家そのものが、原理主義的な体質を内在させている。(四三頁)

「市民宗教」(ロバート・ベラー)とは、国家、あるいはその民族にアイデンティティーや存在の意味を与える特定の宗教体系、あるいは価値の体系の謂いである。別の研究者(森孝一同志社大学教授)は、これを「見えざる国教」と呼ぶ(四五頁)。

米国の見えざる国教は、キリスト教に近いがキリスト教そのものではなく、ユダヤ教、キリスト教的価値観を包含し、多民族国家アメリカを統合するための宗教体系である(四五頁以下)。

十九世紀後半、南北戦争を経た米国の社会変化はかつてない規模のものであった(四七一—四八頁)。

「北部諸州は農業社会から産業社会へと構造転換を迫られていた。大都市に工業地帯の形成、労働力としての東欧やイタリアからの大量移民。労働環境の悲惨、子女の長時間労働。」

リベラル派プロテスタントは、「後千年王国説」を採る。それによれば、人間の努力によって神の王国が建設された後に、キリストの降臨があるとする。これに対して、米国の原理主義は「前千年王国説」を採り、終末の直前にキリストが降臨し、彼の支配による千年王国が打ち立てられるとする。(英国人宣教師ジョン・ダービー)

一九〇九年、『スコーフールド註釈聖書』公刊。これも前千年王国説を唱える。米国原理主義者にとって最も権

威ある文書とされた(四九頁)。

八 一八七三年に、ニューライト・プレズビテリアン神学校(ニュージャージー州プリンストン)のC・ホッジが『体系的神学』を公刊した。その息子A・ホッジらは、聖書の一字、一句が誤りのない客観的真実であると主張している(五〇―五一頁)。

一八七四年に、C・ホッジ『ダーウィン主義とは何か』を公表した。

彼等は理性のみが論敵をひれ伏させることができるというが、理性のみによって理性とは別の次元に存在する宗教的真実を語ろうとすれば、その主張と相容れない教義、信仰を切り捨てざるをえなくなってしまう(五一頁)。リベラルなプロテスタントは、スラムにおける福祉や教育活動を通じて神の正義を実現していこうと説いた(五二頁)。ドイツ生れの「高等批評」が注目される。それは、聖書を実証的、歴史的に文献研究対象とする。

一八九一年、「高等批評」を語った若い司祭(牧師?)が異端裁判にかけられる。裁判の結果、当該司祭は釈放された。そして、これにより、保守派は劣勢に立たされることになった(五三頁)。

一八八六年、ドワイト・ムーディ(米国原理主義の父)、シカゴにムーディ聖書研究所を設立する。ムーディも貧困層に目を向けた。尤もそれは共産主義への警戒心からであった。世界が破局する直前には悪魔の勢力が拡大するという終末の世界と二重写しになっていた。

一八八七年、アメリカ防衛協会(アメリカ最大の反カトリック団体)結成。

一九〇二年、ノースウエスタン聖書学院

一九〇七年、ロサンゼルス聖書研究所(L・スチュアート設立)

九 いよいよ原理主義の登場について語るときが来た(五五頁)。

二十世紀最初の二〇年間ほどは陣営を問わず、社会問題に強く関与しようとして試みた。リベラル派は、一九一一年にチャールズ・ステルツェルが「ニューヨーク労働者寺院」を建設している。これはプロテスタントと社会主義の合体したものであった。

保守派はどうかと言うと社会運動を強化した。社会救世活動は悪魔に対する闘いであり、物質主義に対する闘いであるとされた。

一八九五年、ナイアガラフォールズにて聖書会議が開かれ、根本主義（又は原理主義）の闘争綱領が採択された。その主要綱領は以下の通りである。

(1) 処女降臨に対する絶対的信仰。

(2) 十字架におけるキリストの死により人間の罪が贖われたこと。

(3) 肉体の復活。

(4) 目に見える形でのイエスの地上への再臨。

(5) 聖書の記述にはまったく誤りがないこと。(フラウアー『アメリカ建国の精神』二五三頁)

さて、こうした社会の動きを背景にして、Fundamentals（諸原理）普及のためのプロジェクト（一九一〇—一九一五年）が始動する。パンフレット三〇〇万部。

プロテスタント保守主義が原理主義に変身していくきっかけとなったもの、それは第一次世界大戦であった。即ち、世界激変の中で、保守派の教義は①反共産主義、②反知性主義のナショナリズムと結びつき、政治との関係性を深めていった（五八頁）。

一〇 原理主義の基本的な性格。それは、敵として設定された「他者」に向けられる恐怖、反感、敵対意識によつ

で際立っている。米国の原理主義のばあいも御多分に洩れず、新移民、共産主義、合理主義に対する激しい憎悪が渦巻いている（五八頁）。

一九一九年、WCF A（世界キリスト教原理協会）設立。（レイリー、A・C・デイクソン達）

レイリー「この戦いは除隊命令のない戦いである。」（五九頁）

一九二〇年、ウィリアム・ブライアン（元国務長官）、猛烈な進化論批判キャンペーン・ツアーを全米で開始した（六〇頁）。

ブライアンは、前千年王国説的終末観を採らず。彼の敵意は進化論にのみ向けられた。と言うのも、①欧米諸国では、科学技術そのものに対する懐疑の念が大衆レベルでも広がった。②複雑かつ専門化した科学の発展は、大衆の素朴な世界認識との溝を深めていった、からであった。

こうした中、反進化論が米国プロテスタント原理主義者にとって最優先課題に仕立て上げられていく（六一―六二頁）。

南部諸州は保守的土壌の強い土地柄。進化論の青年層への浸透を恐れたフロリダ、アーカンソー、ルイジアナ、テネシー等、公教育における進化論教育を禁じる州法を制定した。

一九二五年、ジョン・スコップス（テネシー州生物学教師）、訴追される。

リベラル派は、クラレンス・ダローを団長とする弁護団をテネシーに派遣した。

原理主義陣営は、ブライアンが裁判を担当した。

ここに、全米の注目を集める、リベラル派信奉する「表現の自由」対原理主義内包の「大衆民主主義」の対決が繰り広げられる。

スコープスには有罪判決。しかし、輿論の「判決」は圧倒的にリベラル派に傾いた。

スコープス裁判によって、原理主義者は宗教界で築きつつあった地位を一挙に失い、米国の宗教、言論の場で、異端者として長く沈黙を守らざるをえない立場に追い込まれた(六三頁)。

そうした状況下ではあったが、しかし、原理主義は、体制外少数派として彼らの主張は一層先鋭化し、政治的には右傾化の道をたどる。

一方、リベラル派は、アメリカにおける外ならぬその原理主義とは近代社会がもたらした矛盾に根をはって育ってきた近代の産物という点を見落とし、原理主義を過小評価した(六四頁)。

一一 こうした状況の中、原理主義は潜行していった(六四頁)。一九二七年、ボブ・ジョーンズ大学設立。これは原理主義の牙城となる。「学生達は卒業後、神の戦士として無神論者との戦いに邁進すべしと教えられていた。大学が敵としたのは、「無神論やヒューマニストによる聖書に対する攻撃」、「いわゆる近代主義者」、「リベラル」、そして「原理において妥協する者たち」であった。」

敵意を抱く者たちによって包囲されているという強迫観念は、恐怖感と激しい憎悪を生み出す。彼らの憎悪は、ナシヨナリズム、民族偏見と結びつくことによって増幅されていくことになった(六六頁)。

一九三〇年までに、五〇を超える原理主義教育を行う神学大学が設置される。又、大恐慌時代においても、二六の大学が新設される。

一九四五年、広島、長崎への原爆投下。↓「神の怒りによる滅亡の日は近いという」悲観的終末観。

一九五〇年代にはビリー・グラハムなどの「テレビ伝道者」の活躍が始まった。

一二 再び、原理主義は息を吹き返した(六七頁)。一九六〇年代、ベトナム反戦運動、公民権運動、ヒッピーなどの反体制文化が現れる。社会が大転換期を迎えたこの時期、新しい文化「ロック、ドラッグ、フェミニズム、性の解放等々。原理主義者のみならず、旧世代のリベラル派にとっても道徳的退廃と映る」に対抗するように、宗教復興現象が顕著となり、それとともに原理主義も息を吹き返した。

一九七九年世論調査：回答者の五割が聖書に誤り無しとし八割がキリストは神であると回答。一三〇〇のキリスト教の伝道専用ラジオ局・テレビ局。一億三〇〇〇万人の視聴者。

原理主義復活要因：①南部諸州の発展。②米ソ超大国対峙時代において、連邦政府が急速に強大化。

一九七〇年代になると、子供を公立学校からキリスト教系私立学校へ通わせる親が急増。

「道徳的多数派」の政治力(モラル・マジョリティー：一九七九年六月ジュリー・フォールウェルを代表として結成)が擡頭する(七〇頁)。

「私たちの国家が道徳的に低下していることを憂慮しており、私たちの国家の基礎である伝統的な家庭と道徳価値が多くの不道徳な世俗的ヒューマニストやリベラル派によって破壊されつつある現実にいやげがさしている。私たちは——アメリカ合衆国に道徳的健全さを取り戻すことを唯一の関心とすることによって結び合わされている。」(森孝一訳、坪内、一三八頁)

かくして、反進化論に代わって、①家族的価値の擁護、②中絶反対、③公立学校における宗教教育強化を争点化する。

原理主義者が社会的影響力を拡大させることができたのは、これまでの排外的、硬直的主張を、時代にあわせて変化させて、それ

によって不安定な時代に米国民が求めていた確かな価値を供給するという社会的ニーズに再び応えることができたからに他ならぬ
い(七二頁)。

一九八〇年代の原理主義の攻撃対象は、フェミニズム。

その攻撃的な姿勢は銃所持規制反対の主張に通ずる。

道徳的多数派は「聖域」から「汚れた世界」、政治の世界に踏み込んだ。その世界で闘争を継続することになる。
しかし、(有力なテレビ伝道師の金銭・女性スキャンダルもあって) やがて衰退していった。

一三 「クリスチャン連合」の擡頭の時代到来する(七四頁)。一九八八年、パット・ロバートソン、大統領選に出馬。フォールウェル(小川氏では「ファルウェル」、河野氏では「ファウエル」と表記)に代わり、原理主義の新しい顔になる。

一九八九年、ロバートソン、政治団体「クリスチャン連合」を設立する。会員数一七〇万人とも。

それに続き、ラルフ・リード(九〇年代の原理主義ヒーロー)が現れる。

一九九六年六月十六日、リード、NBC放送「ミート・ザ・プレス」で注目すべき懺悔の発言を行った。

「今世紀、社会的正義を求める主たる闘争において、白人エヴァンジェリカル教会は、傍観していただけでなく、間違った態度をとった時期があった。」(坪内隆彦『キリスト教原理主義のアメリカ』一九九頁)

これはクリスチャン連合の方針・方向転換を意味するのであっただろうか？

一四 「九・一一」以降の原理主義の動向(七五頁)

米国歴史を通覧してみると、「原理主義が力を得るのは、時代が転回し、社会が流動化する時である」(七五頁)。

ファルウエルのような米国のキリスト教原理主義者が抱いている終末観によれば、流浪の民であったユダヤ民族が古代の父祖の地に帰還するのは、キリスト再臨の前兆と考えられている。そのために、米国政府はイスラエルを支持し、異教徒（イスラーム教徒）を聖地から追放すべきであると彼らは主張するのだ。「九・一一」以後、このような原理主義者の世界終末ビジョンを現実のものとして受け止める米国民が増えている（七七頁）。

世界を善か悪かに分けるキリスト教原理主義者と、イスラエル中心の中東再編を目指す新保守主義者（ネオコン）が共同歩調をとり、米国の外交政策を左右する（七八頁）。

以上は、基本的に、小川忠『原理主義とは何か』に基づいてまとめたものである。

Ⅲ ローター・ロースの独自の分類と考察

一五 長年ボン大学でキリスト教社会学論と司牧神学を講じたローター・ロースは、キリスト教的自然法哲学を巡る相对主義と原理主義の緊張関係という精神状況を問題とした独自の見解を展開しており、その示唆するところが興味深い。以下では暫くその主張を辿る(Lothar Roos, *Christliche Naturrechtsphilosophie im Spannungsfeld von Relativismus und Fundamentalismus*, S.107-134.)。

そもそもロース教授がこの問題設定を行った背景には、現教皇ベネディクト十六世の自然理性及び自然法に関する基本的態度を正しく理解しようとの探求心があった。どういふことかと言うと、「教会の社会学論は理性と自然

法によって議論を行う」という発言と「自然法は万民に本質相応なものに定位する」という命題に関連して、そこに含まれている問題を明らかにすること、しかも相対主義にも原理主義にも陥らずに自然法の真理を明らかにすることが目指されたということである(Roos, S.107)。つづいた目論見の下に三つの事項が論じられている。一、万民共通の真理とは何か。二、原理主義にも相対主義にも陥らずにこの真理探求を辿る方途は如何なるものか。三、キリスト教的自然法哲学の文化形成力の本質は何処にあるか。本稿に直接かわるのは、二番目の問いである。当然ここを中心以下に以下の論述は展開される。

一六 第一の問い、人間についての真理の三次元について。有名なカントの三命題「我々は何を知りうるか」、「我々は何を為すべきか」、「我々は何を望んでよいか」を、ロースは「事物(事態)とは何か」、「価値とは何か」、「意味とは何か」と言い換える。これらは緊密に関連する問いである。三問題は、ロースによって、簡潔に「事物真理」、「価値真理」、「意味真理」と名付けられる(Roos, S.108-110)。

一七 事物真理Sach-Wahrheitは、人間本性の生物物理学的・心理学的な所与に関わる。人間は他の動物とは異なった仕方ではあるが、それでもやはり自然の諸法則に依存している。ロースは、この連関で、トマス・アクィナスが集団的な財産所有、即ち共有形態よりも単独財産所有、即ち私有形態を優先すべき議論を展開したことを引き合いに出している(山田秀『百周年回勅』の今日的意義——法哲学的観点から——(二))。

価値真理Wert-Wahrheitは、我々が為しうるものについて、何を為すべきか、又為してもよいかという問いに関わる。この価値真理の領域で特徴的なことは、事物真理の領域でみられるような単なる所与としての真理ではなく、課題として自分自身で形成しなければならない秩序が、価値真理が問われているということである。

意味真理Sinn-Wahrheitの領域においては、根本決定に応じてそれぞれの仕方で、人は倫理的「善の秩序」に対

する問いに応えることになる。意味真理の次元は神への方向を暗示もするが、キリスト教の場合だと神は創造秩序の内に「自然的な」啓示と超自然的言葉の啓示によって自己を人間に示す。人間に普遍的な現象として宗教並びに宗教生活が認められるのであるから、宗派などを問わず、その宗教的超越能力によって人間は自己の人生と世界の意味に関する発言を行って来た。「意味問題にどう答えるか」というその態様は個人的な生活にとっても社会全体の社会生活にとっても重要な意味を有している。」

古代ギリシヤ人も以上に述べた区別を、ポイエーシス、プラクシス、テオリアという表現を用いることによって、知っていた (Roos, S.110.)。

一八 ロースは、近代における真理探究が、相対主義と原理主義の文脈においてどのような姿で遂行されたかを描く。それに先立ってロースは、「相対主義や原理主義は、人間像並びにそれから導出される倫理的帰結を決定する際、人間にかんする真理の三つの次元の「真理、即ち、事物真理、価値真理、意味真理の」うちの二つ乃至二つが部分的に軽視されるか完全に無視される場合に常に擡頭する」と言う (Roos, S.110.)。ここにはロースが原理主義を捉える特徴が既に明瞭に現れている。これは通常の原理主義の理解とはやや異なるように思われる。

さて、中世の普遍主義との関連でみると、政治的には神聖ローマ帝国が地方分裂化して国民国家の誕生に徐々に取って代わられて行く過程として、教会の問題という観点からは前宗教改革時代の教会の権威が揺らいでいく過程として特徴づけられる。後者に関してマルティン・ルターが想起される。彼は啓示に対して有する人間の自然理性的な能力を否定し、それと共に自然法を非難した。二十世紀においても、カール・バルトやヘルムート・ティエリッケといった神学者がこの立場を取り続けた (Johannes Messner, *Menschenwürde und Menschenrecht, bes.Naturrecht und Sozialtheologie*, S.71-83)。哲学の分野でデカルトは「我思惟す、故に我在り」と言ったが、

前教皇ヨハネ・パウロ二世は、これを「エッセ」を「思惟」に下屬せしめるものと捉えた。その含意は、人間についての真理は神の創造と啓示によって「予め与えられている」のではなく、自律的理性に「課せられている」ということである (Johannes Paul II., Erinnerung und Identität)。¹²⁾に見られる動向、即ち、人間の思惟と宗教的信念とが思惟構想と行為構想の全体的連関から引き離され、信仰とエートスと学問が分離独立していく動向を「世俗化」Säkularisierungと呼ぶ (Säkularisierungについては、J. Llompartがしばしば興味深い指摘を行ってゐる)。

後書き

一九 ローター・ロースは、前に見たように、相対主義にせよ原理主義にせよ、それが擡頭するのは何時でも「人間像並びにそれから導出される倫理的帰結を決定する際、人間にかんする真理の三つの次元のうちの二つ乃至二つが部分的に軽視されるか完全に無視される」場合であると言ふ (Roos, S.110)。そしてこの指摘は極めて重要であると私は思う。何となれば、構造的な問題成立への視点と理解がそこに見られるからである。そして、私は特にロースが語る三次元のうち何れかが軽視されるという事態、同じことを言い換えるならば、或る一次元を絶対化して全次元に不当に及ぼそうとするときに原理主義が登場・擡頭するという見解に深く賛同する。それと同時に、否、私の考えではそれ以上に、原理主義というべき現象は、人間本性の構造それ自体に由来する性質のものであるが故に、「原理的なるもの」を求めて已まない人間の根本衝動として、いつ登場しても不思議でない。勝義での哲学、

即ち、ピロソビア（愛知）という人間の最も根源的な行為からして「原理的なもの」の確かな現れであって、それ自体は全く問題ない。それどころか、寧ろ推奨されるべき人間的行為であり活動である。しかし、それが自己の守備範囲、妥当領域を越えて妥当要求をするときに「原理主義的なもの」乃至「原理主義」として問題となるのではないか。

二〇 第二節で「イスラーム復興」の一部としてのイスラーム原理主義を見た。そして、米国の原理主義も、建国の理想から墮落してしまっている現在を断罪する形で、様々な問題提起を行いながら展開されて来ている。それは、人間本性の要請に由来する社会の目的がそれに相応しい仕方では少なくとも十全に実現されていない、否寧ろ、阻害されているという全体的な認識と連動しているのではなからうか。孔子に見られる宗教性を前提にして、その教えの哲学的理論づけを行ったのは朱子学であった。その朱子学の展開過程における問題性を捉えこれを批判克服しようとする運動に陽明学があった。両者ともに儒教の経書を前提として展開された謂わば「儒教神学」であった（山下龍二『朱子学と反朱子学』第一章、及び、同『儒教と日本』、一六一―一八頁、一四三―一七〇頁）。ここでも、現状の問題性をより根源的なもの、今の場合、経書とされる訳であるが「周知の如く、陽明学では良知に収斂していく」、経書はキリスト教における『聖書』に該当するものであるから、やはりここには明瞭に根源的なものに遡源して現実を捉え返そうとする人間的なぎりぎりの真摯な姿勢が窺えるのである。かつて別稿で「善さを求める人間本性」を論じたことがあるが（拙稿『善さ』を志向する人間本性）、ここでも基本的に同じ観点から同じ趣旨において人間の自己理解を主に教育を論題に据えて考察してみた。

雑駁な考察を披露して来た本稿は、基本において、人間とはより確実で頼りになる根源的なもの、原理的なものへの関心に突き動かされて人生を生きようとするものであること、及び、その構造的な意義と問題性を私なりに指

摘し、解明し、問題提起をすることを目的としていた。

参考文献

- 小川忠『原理主義とは何か——アメリカ、中東から日本まで』講談社現代新書、二〇〇三年
- 河野博子『アメリカの原理主義』集英社新書、二〇〇六年
- 栗林輝夫『キリスト教帝国アメリカ——ブッシュの神学とネオコン、宗教右派』キリスト新聞社、二〇〇五年
- 坪内隆彦『キリスト教原理主義のアメリカ』亜紀書房、一九九七年
- 中山俊宏『アメリカが保守化した背景およびその外交的インプリケーション』『社会と倫理』第十八号、二〇〇五年（四一—五八頁）
- J・C・ブラウアー（野村文子訳）『アメリカ建国の精神——宗教と文化風土——』玉川大学出版部、二〇〇二年
- 山下龍二『朱子学と反朱子学——日本における朱子学批判——』研文社、平成三年
- 山下龍二『儒教と日本』研文社、平成十三年
- 山田秀『『百周年回勅』の今日的意義——法哲学的観点から——（二）』『社会倫理研究』第二号所収）一九九三年
- 山田秀『善』を志向する人間本性——村井実博士の自然法論的教育思想——（『南山法学』第三十一卷、第一・二合併号所収）二〇〇七年
- Lothar Roos, Christliche Naturrechtsphilosophie im Spannungsfeld von Relativismus und Fundamentalismus, in: Werner Freistetter u. Rudolf Weiler(Hg.), *Mensch und Naturrecht in Evolution*, Wien-Graz 2008.
- Johannes Messner Ausgewählte Werke* hrsg. von Anton Rauscher und Rudolf Weiler in Verbindung mit Alfred

Klose und Wolfgang Schmitz, Verlag für Geschichte und Politik Wien u. Verlag Oldenbourg München. Band 6: *Menschenwürde und Menschenrecht: Ausgewählte Artikel*, eingeleitet von Anton Rauscher und Rudolf Weiler, Wien-München 2004.

追記

拙稿は、当初の計画を一部断念して検討不備の箇所を残しつつも「研究ノート」として公刊する。およそ一年前に（恐らく二〇一一年三月）岸本研究室で学問談に花を咲かせた折に、岸本氏から畳み掛けるような鋭い質問に遭い、その時に説明のために話題にしたのが「原理主義的なるもの」という観念をめぐる私の漠然とした考えであった。その後、折に触れてはこの問題を考えて来ていたところ、同氏が図らずも今春移籍するという事態に至ったため、日頃のご厚意に対する感謝の意を込めて、極めて不完全な形ではあるが、岸本氏の門出を祝すという意味で拙稿を捧げたい。ご受納あらんことを。